国際総合学類の教育目標

1. はじめに

本学類の教育目標は、大きく次の三点にまとめることができる。

第一に、急速に変動し複雑化する国際状況に対応して、「何が問題であるか」をつきとめ問題解決へと立ち向かう、シャープな問題意識とバランスのとれた国際センスの涵養である。すなわち表現力豊かで積極性、社交性に富む国際人を養成し、国際的に活躍できる分野に卒業生を送り出す。

第二に、この問題意識から問題の本質の把握へと向かう学際的分析能力の総合的養成である。すなわち人文・社会科学と工学双方の基礎的素養を身につけさせるとともに、現実の問題に対する理解力と応用力を備えた社会人を養成する。

このために本学類では、以下の表のように体系的にカリキュラムが構成されている。
すなわち、

(a) 基本的学問分野の学習

基礎的な社会・人文科学および情報科学・工学の複数のディシプリン教育を通じて、問題を抽象化し、その本質を捉える能力を養成する。

(b) 学際的分析法の習得

国際比較や歴史的背景、人文・社会科学系と情報科学・工学系との融合領域に対する知見や分析方法の習得を通じて、問題に対する洞察力を涵養する。

(c) 政策志向的および理論的研究・学習

専攻科目の学習を通じて、他の問題との類似性の把握や具体的解決策の構築に寄与する理論的知見を涵養する。

第三に、国際的に通用する表現力の養成である。日本語と英語を併用した教育を通じて、多言語能力を備えた人材を養成する。多くの英語での講義・演習や積極的な英文テキストの使用、ディスカッション、ディベートの科目の設定に加え、「独立論文(BC13 科目)」や「卒業論文」の作成指導のための少人数セミナーを通じて、国際的に通用する説得的な議論を展開できるような能力を育成しようと努めている。

国際総合学類の教育体系

<table>
<tr><th>1 年次</th><th>2 年次</th><th>3 年次</th><th>4 年次</th></tr>
<tr><td rowspan="2">専門基礎科目
(必修・共通)
BC50</td><td colspan="3">専門科目
国際関係学主専攻 BC11,BC16
国際開発学主専攻 BC12</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>卒業論文
BC14</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">専門基礎科目(選択)
BC51 BB050 FH611 GA12 FG10641</td><td colspan="2">専門ゼミナール
BC13</td></tr>
<tr><td colspan="2">インターンシップ
BC15</td></tr>
</table>

授業科目領域

国際関係学主専攻 BC11,BC16	国際開発学主専攻 BC12
国際関係　政治学　経済学 歴史学　国際法 人類学	経済・社会開発 情報学 環境学

2. 教育課程の体系化

平成 7 年度に国際関係学主専攻と国際開発学主専攻を柱とする国際総合学類に改組して以来、平成 12 年度に大幅なカリキュラムの見直しを行い、また平成 13 年度に多数の新任教員を迎え授業科目のさらなる充実に努めた。さらに、平成 19 年度の学群・学類改組に当たって、授業科目の大幅な見直しを行った。

1) 経済・社会開発や情報・環境の分野で顕著にみられるように、文系、理系の枠を越えた学際領域の素養を身につけた職業人が要請されるようになっており、これに応えるためカリキュラムの根本的見直しを行った。

2) 従来から当学類の強みであった人文・社会科学系及び語学の科目を充実させるとともに、工学系科目についても、他学類と共通開講科目を設定し、授業科目を一貫した体系とした。これにより、文系志向の学生の情報・環境分野への参加を促し、グローバリゼーション、市場化、情報化が急速に進展する国際状況に対応できる人材を育成する体系とした。

3) 当学類のバイリンガル性を生かした社会貢献として、社会教職免許に加えて英語教職免許を取得できるようなカリキュラム体系を構築した（令和元年度以降は英語教職免許のみ取得可）。なお、「English Discussion Seminar」および「English Debate」の授業は複数教員・複数教室による授業構成を取り入れ、教育効果の向上を目指した。

4) 現代社会では、国際的な情報通信システム、ネットワークの普及に伴い、新たな情報通信技術による社会構造の変革が起こりつつある。このような新しい変革に対する積極性や異分野の人たちと協調しながら仕事ができる広い視野は、あらゆる局面で重要な資質となっている。インターンシップ科目の導入や、エンジニアリング・ベーシックスとしてのコンピュータや情報関連の素養を、文系理系双方の基礎として学べるように配慮した。

5) ボーダレス化した高度情報化社会では、そのシステムの複合・巨大さの故に、環境・防災・安全性などの面でさまざまな問題を抱えている。これらの問題の中には地域や地球規模での対応が必要とされているものが少なくない。このようなリスク問題に対して、わが国の国際貢献の観点から、環境分野における国際開発分野で活躍できる人材を育成できるように配慮した。

6) 令和 3 年度（2021 年度）から開始される「総合選抜」（入学後に学類を選べる新入試制度）に向けて、令和元年度より、国際総合学類の専門基礎科目（必修）である「国際学Ⅰ-Ⅳ」を「専門導入科目」として開設した。また、他学類（社会学類、社会工学類、情報科学類、工学システム学類）開設の専門導入科目を、専門基礎科目（選択）として履修できるようカリキュラム体系を整備し、学類の枠を超えた文理融合の総合知構築による学際的教育体制を拡充した。

3. 国際総合学類生のミニマム・リクワイアメント

国際総合学類では、次の科目を必修科目としている。

国際学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（計 4 単位）
卒業論文（6 単位）

4. 多彩な教員、他学類との相互乗り入れによる講義の充実

国際総合学類では教員公募方式によって国内外に広く人材を求めた結果、カナダ、エチオピア、ロシア、ウズベキスタン、インド、インドネシア、中国などからの外国人教員のほか、海外での教育・研究経験の豊かな人材が講義を担当している。平成 21 年度からは、社会・国際学群の社会国際教育プログラム（Undergraduate Program of International Social Studies: TISS）の英語コースの科目が履修できるようになった。

他方で関連する社会学類、社会工学類、情報科学類などとの授業科目の相互乗り入れを多く採り入れている。加えて、社会学類、社会工学類、情報科学類、工学システム学類開設の専門導入科目については、

専門基礎科目（選択）として履修できるようになっており、学類の枠を超えた学際的教育システムが整備されている。

次に国際総合学類を構成する国際関係学主専攻と国際開発学主専攻の授業領域の教育目標を紹介する。